

今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.032 行橋警察署

日本の警察行政の始まりは、明治維新後の近代国家建設と深く関わっています。江戸時代には、町奉行や火付盗賊改方ひつけとうぞくあらためかたなどが治安維持を担っていましたが、明治政府は西洋型の近代警察制度を導入。明治7年（1874年）、警視庁を創設し、初代大警視には川路利良かわじ としよしが就任しました。川路はフランスの警察制度を参考に、中央集権的な警察組織の整備を推進。当時の警察は、犯罪捜査や治安維持だけでなく、戸籍管理、衛生、消防など幅広い行政業務も担っており、政府の統治機構として重要な役割を果たしていました。その後、全国に警察制度が整備され、日本の近代警察行政の基盤が築かれていきます。

1945年頃 / 昭和20年頃

■ 行事警察署から行橋警察署へ

行橋に警察署が置かれたのは、明治15年（1882年）のこと。京都郡行事村中島1138番地に「行事警察署」が開設されました。場所は現在の大橋三丁目16番地付近（現・池辺ドライ工場洗濯倶楽部周辺）で、長峽川に面した当時の中心市街地でした。当時、行事村には長峽川を越えて南側の大橋村に飛地があり、中津街道沿いに広がっていたことから、「行事出店ぎょうじでみせ」と呼ばれていました。

大正4年（1915年）には「行橋警察署」と改称。翌年、庁舎が手狭になったため、新庁舎が建設されます。



▲長峽川に架かる萬年橋（中津街道筋）からみた2代目の行橋警察署。警察署の奥の屋敷は「柏木邸」で、戦後、京都酪農協同組合が買収し酪農会館、ミラモーレゆくはしとなった。現在は図書館等複合施設「リブリオ行橋」となっている。

2026年 / 令和8年

■ 市街地の発展と庁舎移転

昭和41年（1966年）、行橋警察署は長峽川沿いから行事三丁目12番1号（現在・コスモス行橋京町店）へ庁舎を新築移転しました。国道10号（現・国道201号）に面した立地は、高度経済成長に伴う市街地の拡大と、道路交通の利便性を見据えて選ばれたものでした。

その後、平成31年（2019年）4月1日、4代目となる新庁舎が、行橋市役所や行橋消防署に隣接する中央一丁目へ新築移転します。行政・防災機関が集約し、地域の安全を支える拠点となる新たな官庁街が形成されました。



▲地上4階建。約170人の警察官が日々勤務にあたり、地域の安心・安全を守る。4階には心身を鍛錬するために武道場を備えている。

行橋警察署は、行橋市、京都郡苅田町（北九州空港を除く）、そしてみやこ町を管轄する警察署です。管轄区域には3つの交番と11の駐在所が置かれています。

近年、この地域は北九州市のベッドタウン化に伴い、住宅地や交通網の整備が進み、都市型の暮らしへと大きく変化しつつあります。利便性が高まる一方で、防犯や交通安全への意識も欠かせません。そうした中、行橋警察署の警察官は、交番や駐在所を拠点に地域住民一人ひとりに寄り添いながら、日々暮らしの安心と安全を守り続けています。